季刊

四季

第十号

四季社

一九八六年四月二十日発行

定価 三〇〇円

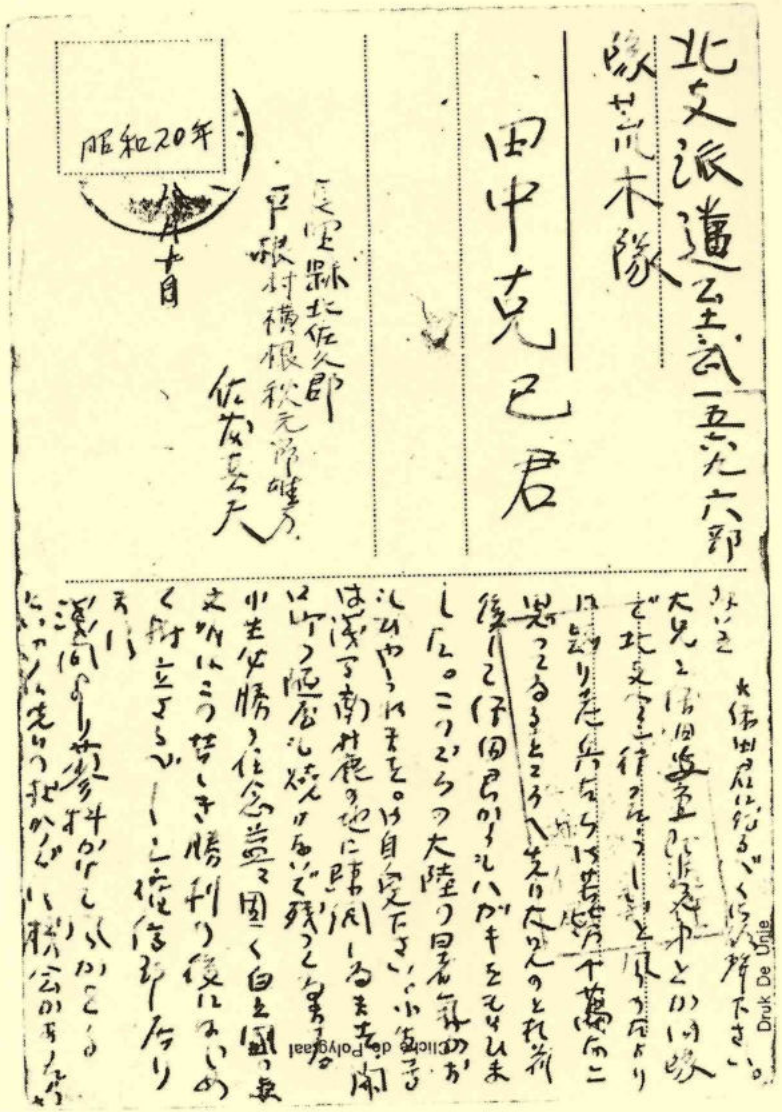
季刊 四季 第十号 定価300円（送料170円）

発行 四季社
〒166 東京都杉並区阿佐谷南1－40－8 田中克己方
電話 03－314－2783
印刷 橋本保印刷
〒536 大阪市城東区天王田7－24 電話 06－961－4330

目　次

季刊四季・第十号

ダヴィンチ「女の頭部」復写 …… 表紙
軍事郵便(佐藤春夫) …… 表紙裏
佐藤春夫さんのこと …… 植村　清二　2
今は亡き妻の回想 …… 高田　瑞穂　4
『隅田川』と寮歌と …… 山住　正己　7
森鷗外旧居趾 …… 牛尾三千夫　10
吉野葛 …… 河村　純一　12
藷掘日和 …… 国友　則房　14
神と詩人たち …… 小高根太郎　18
青い空の下で …… 石山　直一　20
場所 …… 杉山　平一　22
回心 …… 坂口　允男　24
ドニエプル川 …… 大野沢緑郎　27
マロニエの花 …… たかはし　しげおみ　29
また春がきた …… 福地　邦樹　31
二つのこと …… 花井タヅ子　33
休刊の辞 …… 田中　克己　35
第九号正誤表 …… 36



佐藤春夫さんのこと

植村清二

昭和九年に兄が亡くなった。あちこちの雑誌などに、いくつか追憶記めいたことを書いた。「早稲田文学」から寄稿を依頼された時には、種切れになったために、「直木三十五の歴史小説」という身の程も知らぬ作品批評のようなものを書いた。ところがそれが評判がよかった。中でも佐藤春夫氏が、朝日新聞の文藝欄で、ひどく賞めてくれた。菊池寛氏のいわゆる「素人の感心」であるが、賞められて悪い気はしなかった。

それからしばらくして、佐藤さんの「陣中の竪琴」が出た。鷗外の「うた日記」に関する劄記である。僕は鷗外も好きである。戦史も好きである。日露戦争については、若干の知識も持っている。そこで早速手に入れて一読すると、記述に不足したところもあり、解釈に、誤ったところもある。そこで僕は余計なこととは思ったが、長文の手紙を書いて、佐藤さんに送った。折り返して佐藤さんからも長文の尺牘を貰った。これは今でもどこかに保存してある筈である。その内容は、後に佐藤さんが、「文学」に「日露戦争文献としての歌日記」として発表したものと、ほぼ同一である。

その後上京して東洋文庫に石田（幹之助）先生を訪問すると、佐藤さんを紹介しようと言われた。石田先生は僕の大先輩で佐藤さんとも交誼があった。多分先生は佐藤さんから、僕について、何か聞かれたのだろう。僕は石田先生と一緒に、本郷のレストランで佐藤さんは神代種亮氏を帯同して来られた。神代氏は当時校正の神様といわれた明治文学の研究家である。食事を了えてから、四人で大学の前の舗道を歩いた。僕はその時佐藤さんの足の悪いのに気付いた。

佐藤さんの、招きで、その翌日かに関口町の「西班牙風の家」を訪れた。カミン爐のある應接間に、千代夫人も姿を見せられた。まだ幼かった方哉君が庭を駈け廻るのを、その頃まだ佐藤家にいた谷崎鮎子さん（後の竹田龍児氏夫人）が「方ちゃん、方ちゃん」と声を掛けながら追掛けていたのを、記憶している。

支那事変が始まってから、佐藤さんは、一度大木惇夫氏などと一緒に松山に来て、講演をされたことがある。多分文学報国会か何かの委嘱だったのだろう。僕は控室で御目に掛ったが、この時の佐藤さんは、何かに憑かれたもののようであった。僕はしばらく話しをしたが、匆々に辞去した。

大東亜戦争が激化して、佐藤さんが信州に疎開されたということは、風のたよりに聞いた。戦済んで日は暮れて、関口町の御宅は戦災には遭わなかったが、不在中に住みついた連中との間に、トラブルがあって、佐藤さんはなかなか東京に戻らなかった。漸くもと通りになった頃に、僕は久しぶりに佐藤さんを訪ねた。佐久の草笛が耳を洗ったのだろう。その時は佐藤さんの憑物は、もう落ちていた。

僕は新潟で、鷗外の桂湖村に宛てた尺牘一通を手に入れて、それを巻子に表装した。その奥書を書いて貰いたいというのが、僕の希望であった。

佐藤さんは快諾した。しかしなかなか書いてくれなかった。その間に突然の死が見舞ったのである。

佐藤さんの生前に話そうと思って、話さなかったことが一つある。それは佐藤さんの漢詩の誤訳である。

「車塵集」の「女ごころ」に、宿昔不梳頭を

むかし思へばおどろ髪

と訳してある。これはいけない。この場合「宿昔」は

つね日頃

と訳さなければならない。これを佐藤さんに伝えられなかったのは、まことに心残りである。

今は亡き妻の回想

高田瑞穂

「結婚して五年、今も私は子供が生めません。長男の嫁になる資格はありません。どうぞ離婚して下さい。」

静子が蒼い顔をして私にこう告げたのは、結婚して四年目の昭和十六年のことであった。

私は答えた。叱った。

「何を言うか。俺は前々から言っているように、結婚は一度しかしないのだ。どんなことがあっても一度しかしないのだ。」

静子は頭を下げ、涙を拭いて、やがてニコニコして言った。

「有難うございます。」

この印象は今も消えないものの一つである。このことのあった直後、どうもお腹がおかしい、と医者に告げ、それが始めての体験の妊娠であったが、妊娠三ケ月の時流産した。すると、その直後から、次々に妊娠し、出産した。長女の生れたのは、昭和十八年九月、そして、次女、長男、次男の順に出産した。最後の次男の生れたのは、昭和二十三年三月、四人とも今も健在である。

＊　＊

「先生より奥様の方がえらい！」

成城大学の教授特に助教授の連中は、しばしば私に向ってこう告げたのであった。その理由は、小生の家を訪れると、家内が色々な食べもの、を出して歓迎したからであった。静子はそういう歓待が好きであった。

私達の結婚したのは、昭和十三年十月のことであった。昭和九年に東大文学部国文学科を卒業した私は、その後三期も大学院に学んだ。教諭として教えつつ、大学院生として学び続けたのであった。結婚直後のことで忘れられない印象は、静子の作った朝の味噌汁が真っ白であったことである。静子は山口県生まれ、小生は静岡県生まれ、小生の味噌汁は真っ赤であった。

「こんな真っ白なのは嫌だ！」

「わたしは真っ赤なのは嫌です」

静子はしばらく、赤白の中間の味噌を使ったが、そのうちに赤の味が気に入った。

＊　＊

お互に還暦を越えた頃から、不断に小生を叱り始めた静子であった。

「どうしてそうすぐ忘れるの。」

「なぜそんなことを考えるの。」

「無駄遣いはやめて下さい。」等々。

私は、成城大学文芸学部教授となった昭和二十九年以来、成城大学関係の給与は、全部妻に与え、それ以外の講師給与原稿料印税などは全部私のものとした。私の銀行は北側の三菱銀行、静子の銀行は南側の住友銀行であった。お金のあつかいは、私にはよく解らなかったが、静子は色々な手をうっていた。税金をへらすとか、利子をふやすとか……。

「静子、お前は大蔵大臣だな！」

「そうよ。だから苦心をしているのよ！」

「お静！おれは総理大臣だぞ！」

「何をおっしゃる。あなたは能無しよ！」

一昨年だったと思ふ。昭和九年に東大国文科を出たものの同窓会があった時、小生は、小生の毎日

必ず目を通す『毎日新聞』の「投書川柳」の一つを紹介した。

〝母親のような口きく老いた妻〟

すると、全員が、「そうだ！　そうだ！」と言った。　老いた妻に叱られるのは、決して私一人ではなかったのである。

そういう叱られ続く状況で、私の心に浮び続けたものは、最晩年の芥川の「西方の人」におけるクリストと母マリア、即ち男と女との次のような対比であった。

「永遠に超えんとするもの」

「永遠に守らんとするもの」

＊　＊

不断に私を叱り続けた存在が永眠し、一人年長の小生が残された今、改めて実感し続けていることは、わびしさ、寂しさに他ならない。それはあたかも、かつて母を失った時の心情と同様である。母は、数え年九十四歳で、昭和五十四年に没した。その年小生は既に数え年で七十であった。そういう小生に、散歩に出る時必ず、「瑞穂！ころんではいけないよ」と告げた老母であった。その母とは非常によく結びついた静子も、晩年は母と同じように小生に告げ続けたのであった。

「気をつけてね！ころばないように……」

そういう母が居なくなってからは、郷里へ帰ることはほとんどしなくなってしまった。同様に、私を叱り続ける静子が居ないのが、わびしさの根源であった。

以上

『隅田川』と寮歌と

山住正己

まったくの私事について記すことになるが、いま、別のことを調べたり考えたりする気持のゆとりがないので、お許しいただきたい。

その私事とは父の死と葬儀のことである。父は二月十九日の昼すぎ、八十七歳で亡くなった。一昨年の暮、咽頭に腫瘍が見つかったが、これは東京女子医大病院での治療によって小さくなり、一旦退院した。しかし明治生まれは我慢強いのだろう、のどの具合がおかしいとは一言も言わなかった。これがいけなかったのだと思う。ちょっとした痛みを大袈裟に言うのは、まわりの者に迷惑だが、あまりに我慢強いのは生命を縮めるもとになる。

その後六月末に、私の妻の弟が営む横浜市緑区の病院へ再入院となった。はじめのうち晴れた日には車椅子で近隣をまわることもあったが、最後の四カ月は寝たきり、しかも栄養は点滴だけに頼ることになった。体調が悪くなって点滴の内容が調整されるや、たちまちよくなるのを目の前で見て、現代医学の偉力と父の芯の強さの両方に敬服した。しかしそれにも限界があり、この冬東京ではじめて雪の降り積もった夜から危篤におちいったのである。

葬儀で最初に弔辞を述べられたのは、旧制第一高等学校時代からの七十年にわたる友人の岡崎嘉平太氏であった。岡崎氏は前日拙宅にわざわざ弔問に来られ、そのとき、明日は形式ばった弔辞ではなく、イギリス風に遺族に向かって故人について語るようにしたいと言っておられたので、私は内心ひそかにそのお話を楽しみにしていた。

当日は一高入学時の父の印象に始まり、文字通り話は尽きぬという面持で語られた。お礼状をさしあげたところ、直ちにお葉書を下さり、そこに「……お話しすればもっと〳〵ありますし、出来れば寮歌の一つも歌ひ度かったのですが、余り世間の仕来りと違っても御葬送の雰囲気を毀すと思ってやめた次第です。お話していると七十年昔の寮生活の昔に帰って終うのでした」と書いておられた。お話をうかがい、この葉書を読んで、岡崎氏と父との長年にわたる交流は、絵に描いたような旧制高校の友人関係であると思った。

お話のなかで、一高時代のある日、二人で隅田川へ櫓を漕いでのり出したところ櫓がきれて舟が転覆したという場面が語られ、以来いっそう生死を共にするという思いであったと言われた。ここで隅田川のことが語られるのを聞いて、私は不思議な思いがした。というのは、葬儀では父の好きな謡曲を会場に流してみてはどうかと前日の朝ふと思いつき、母や弟たちと相談の結果選んだのが、なんと『隅田川』だったからである。話の筋はこういう場にちょっとそぐわぬとも思ったが、念仏の場面があるというので、これに決めたのである。この曲は開会までのひとときと、告別式の後半、会場に流された。

岡崎氏は寮歌の一つもうたいたかったと書いておられる。たしかに、少なからぬ学校の歌のなかで、旧制高校の寮歌ほど、その同窓生にうたいつがれてきた歌はないと思う。父も酔うと必ず寮歌を大声でうたった。同じく同級生であった坂口謹一郎氏は「悼山住学兄」として、

「梅散るや遠ざかりゆく寮歌吟」

という句を短冊に書いて送ってこられた。やはり寮歌である。

寮歌は、旧制高校生集団という特定の閉じられた集団の歌であり、もっとも有名な『嗚呼玉杯に花うけて』にしても、「濁れる海にただよえる我が国民(くにたみ)を救わんと……」というように選良意識・指導者意識まるだしで、鼻もちならぬところがある。しかし、いまでは、そのなかの何曲かは一般向けのなつかしのメロディ集にものるようになった。

そうはいっても旧制高校が廃止されてから三十五年になる。今後この寮歌はうたわれるかどうか。これらよりも『隅田川』の方が生命は長いのではないか。しかしこれも狭い集団のなかでうたわれる曲にとどまるのではないか。こんなことを父の葬儀の最中に考えていた。

（一九八六年三月一日　夜）

森鴎外旧居趾

牛尾　三千夫

津和野なる　森鴎外の旧居趾。修復成りて、柿は熟れ居り

青野山の　麓の村の家々に、柚子はたわわに、今黄ばみたり

備後なる　吉備津神社の寒櫻。今咲きゐむと、思ひつゝ眠る

雪のふる夜に、「澄江堂遺珠」を　読み居れば、春蘭の茶も　今は冷めたり

三次の東地屋の泡雪を食べ、春蘭の茶を飲みて、田中冬二全集を読む。雪の夜更けに

迢空の「かそけさ」「ひそけさ」より、「しづけさ」へ、移りゆきしは、茂吉も同じ、歌の奥処か

我が家の　世々の親達。冬の夜の　この寒月を　いかに見さけむ

我が顔を　鏡にも見ず、あけくれて、立春と云へば、陽は黄ばみたり

吉野葛

河村純一

川上の妹背の山を見放けむと吉野川原の苜蓿を踏む

吉野川渡りて深き杉山の奥処の墓に辿りつきたり

山川をさかのぼる身に空晴れて大台ケ原の雨に遭はずき

後南朝を敢へて問ふなし耳遠く言葉少なき老運転手に

自天王弑殺の谷もダムとなり四辺の若葉声のうぐひす

段々畠に老婆がをりて下道の吾を旅人として声をかく

吊橋に鳴る下駄の音を恋ひ来しに昔より吊橋は無かりしと言ふ

目覚めたる暗闇に何の音もなく空気清しと寝ながらに吸ふ

あかときの前谷くらし向つ峯の尾根のあたりか小鳥しき啼く

後南朝哀しむのみに来しならず朝早き宿にアメノウヲ食ふ

藷掘日和

1

梅雨明けの　朝だ。
南から北へ　日本列島は
まだ　厚い氣圧の谷に　挾まれて
あちこちに　雨雲が　残っているが、
むさし野は　爽やかに晴れて
絶好の　藷掘日和である。
わたしは　薄明に起きて
家族たちの　寢息を　うかがい、
乳母車に　シャベルや　木鋏をのせて
市営の　老人農園へ　向った。

国友則房

2

朝の　熟睡の時刻なので
誰もいないものと　思ったら、
石垣の根本で　団地婦人が
せっせと　笹籔を　刈っていた。
――あれ　朝っぱらから
　よくも　お精が出ますのう？
奥さんは　運動帽に　手をやり
生娘のように　含羞んだ。
――ええ　草鎌が　錆ついて
　思うようには　切れませんの。

3

農作業は　お手のものと
威張っていた　二坪農園には
夏草が　わが物顔に　はびこって
籔蚊の　棲家になっていた。
――こりゃ　ひでえ荒れ様だ。
　一週間も　見廻らぬ　罰だぞ。
わたしは　構わず　シャベルを取って
草の根っ子を　掬い上げた。
すると　道産子の　馬鈴薯が
鈴生りに　畔道へ　転がり出た。

4

わたしは　勝ち誇ったように
急いで　新しい藷を　麻袋に詰めて
水道の蛇口で　手足を濯いだ。
ゴルフ場へ続く　公園の森には
朝の陽光が　きらきら射して
何に驚いたか　騒ぎ立てた。
赤松の梢に　巣食う　親子鴉が
――母さん　かあかあ　かあかあ
　朝餉の仕度は　出来たかよお！

神と詩人たち

小高根　太郎

生れて、なやんで、死んでいった。怪奇不吉な遺伝子の組合せ。十字架にかかった人の子たちの真白な腹はつんざかれ、血みどろの傷口からは、まがまがしい淫乱と愚行が、だらりと垂れさがり、鬼火を燃やすアブサンにひたし、阿片や大麻の毒煙でいぶした皺だらけの脳みそから、きらめく地獄の花火と、魔王を喚びおこす呪文めいた、どすぐろい雷雲を噴きあげた——ボードレール・ヴェルレーヌ・ランボーたち。

彼らの骸骨は百年の風霜に晒れ——ああ、またしても世紀末——冷い無感動な宇宙空間を、微塵のような地球に乗ってすべって行く——失望と虚無と不可知の彼方へ。誰が知ろう、あがきもだえ、なやみ苦しみ、狂乱し絶叫した生の奴隷たちの生存の意味を。あてどない彷徨と苦悶の末に、足ふみはずして墜落した底無し沼の闇黒の中に、彼らはおのが罪深さにふるえおののき、懺悔回心して—ルセアト・ドミネ——神の御加護を祈った——と人はいう。しかし時空を超越したもう絶対の神が、もし万一にもいますとしても、あわれ、のろわれた詩人たちの、悲鳴にも似たみじめな祈りの声は、黄金の高御座をかこむ天使たちが高らかに歌うホザンナの大合唱にかき消され、ついに至高至聖の御耳には、達することができなかったのだ。

青い空の下で

石山直一

時間の中で、部分として生かされながら
私は永遠と全体とを思っている
青く澄みきった大空はそのことの象徴のようだ
すべてが過ぎてゆくこの世界を超えて
過ぎてゆかないものがたしかにあることを
無限に高く、無限に広く
しかし、目に見える形で示してくれる

青い大空を見上げていると
私は七十路の坂を上っていても
行く手の詰まって来たことを覚えない
けれども、糸を切られた風船のように
ふわふわと大空へ舞い昇ってゆくことは私の願いでない
青い空のあることに安心して
かけがえのない部分としての私のいのちを
この大地の上で
いまの一歩一歩に燃焼させてゆきたい

場所

杉山平一

さて　どうしよう　と
ドアの前で　立ち止ったのだが
自動ドアが　スーッと
あいてしまって
心にもあらず　入ったのだ

願うところに俺が在ると
思うな

相手

何もない

空間にむかって

オーイ　と呼ぶ

返事した人が

ぼくの相手だ

回心

坂口允男

アメリカの宇宙船チャレンジャー号は
打上げ後間もなく爆発、
七人の尊い命は一瞬に空に消えた
しかしアメリカ大統領は言う
「宇宙計画はただ前進あるのみ」と

いじめによって小学生・中学生の
自殺が相ついでいる。体罰によって
教師が生徒を死なせた。

しかし教育者は常套語を
繰り返しているだけだ。

政治家は黨利黨略を第一とし
選挙に勝つ事だけしか考えない
資本家も労働組合もその他多くの人々も
自分の利益だけを追っている。

世界は地球を全滅させるに十分な
核を抱えながら
核を廃棄せよと叫ぶ声より
核の保有を主張する力の方が強い

罪の意識の乏しさ
悔い改めの心の欠如
ここに現代の病弊、禍根がある
心の荒野に叫ぶ予言者はいないのか

今われわれの文明は
ソドム、ゴモラのように亡びるか
ニネベのように救われるか
その境目にいるのだ。

ドニエプル川

大野沢　緑　郎

十一世紀の石段をのぼる　ペチエルスキー修道院の狭い坂道を地下洞窟にはいる　ろうそくのように細い裸電球の迷路に百体の木乃伊の聖者が白布にくるまったまま　めいめいの手首をその証しに円筒形の砂岩の部屋部屋に眠っている　しゃれこうべだけの隅　子供ばかりを竝べている部屋　暗くながい地下墓地を匍いだすとスキタイの出土品がわずかにぼくらの呼吸をととのえてくれる　ドームのしたの隅々にたむろしている老婆たち　そうしてウスペンスキー寺院は爆撃の瓦礫のままである　ここ　古いふるい石だだみの　栗　マロニエ　菩提樹の深い樹立のむこうにドニエプルの流れが光っている　メトロ橋　トルハノフ島のかなたに　果てしないウクライナの蒼穹が拡がっている。

旅愁

ネヴァ河のむこうにペテルブルグのシルエットがつづいている　尖
塔のうえのあかね雲に白夜の季節をすぎた刻がバルト海にながれく
だっている　オブホフスキー橋の石の欄干に凭れ　ついさきほどめ
ぐっていたピョートルの夏の庭を　その深い樹立のおくを　ピスカ
リヨフ墓地の菩提樹の並木　オリガ・ベルゴリッツの詩をかみしめ
ている　ゆうぐれ　とおい街の美しい夕ぐれ　そうして明日はどこ
か　このあまりにひろい空の果てに　つきることないあの森と流れ
のつづきのうえに　とめどない想いがひろがっていっている。

マロニエの花

たかはし　しげおみ

春は三月、受験のとき、ソルボンヌから贈られたという
マロニエの並木を見にいった　　やや太目の
すこやかにのびた枝、梢という梢のさきっぽ
大きなたら芽が天を指していた

陽がとどかないアーケードのすみずみに　まだ
残りの雪がこおりついていたから　四月といっても
春はまだまだ　と思っていたのだが　いつしか夏
思い出した頃には　マロニエの花は終っていた

生い茂っていたその葉が散る頃　学校からは追い出され
卒業式があったのか　なかったのか　繰上げとやらで
卒業証書は次の年の秋に送られてきたのだが

あれから既に四十年　四月がくると思い出す
本郷のマロニエ並木　今年もたら芽がつき出してるか
花の便りは　あるのだろうか

また春がきた

福地邦樹

あたりが春めいてくると
老人の姿がめだちはじめる
とぼとぼの老人　佇む老人　買物する老人
ゲートボールの老人達
子供達の広場はますます失われ
やはりお年寄は大事にしなければならぬ

春は何となく心が和らいでくる
デパートやスーパーに人があふれ
本屋もいやになるほどお客さんがふえ
これは最も安価な娯楽である

スポーツセンターやテニスコートや
ボーリング場に色とりどりの男女があふれ
健康は何より大切である

僕はそんな非生産的な行為は
おことわりだから
三十坪の貸農園に出かける
しかしそこも老人が沢山いて
僕のたまの日曜の時間の半分は
老人との対話につぶされてしまうのだ

二つのこと

花井　タヅ子

この世に
直線はなく
直線の両端が
無限大の圓を描きながら
相出合っていると気づいた時から
気が楽になった

太陽は
雲のむこうでは
いつも照っている
雲の厚さ　薄さ　切れめを
透かしてこちらにもれて来る
その光景の美に打たれた時
体はこ踊りしていた。

（61・2・28）

休刊の辞

昭和23年に天下無二の愛書家（読むのでなく買取り専門）の天理教管長中山正善氏が京阪の愛書家を集めて『ビブリア』という雑誌を出そうとの計画をされた。当時わたしは天理図書館の司書で、図書館からは富永館長以下中村幸彦、新井トシとわたしとが陪席し、頴原退蔵、神田喜一郎、寿岳文章、石浜純太郎などの諸先生が集まられたが、台湾から引揚げて同志社大学教授だった矢野峰人先生ももとより御同席で『ビブリア』刊行の議は異議なく成立した。そのあとわたしは矢野先生のお宅へ原稿を頂きに参上した。先生はふと『四季』再刊を堀さんにいうようにと申された。わたしは西川満氏の主催の雑誌にペンネームで良い詩をお書きになっていたのが、矢野先生と承知していたので、早速その旨を堀さんに手紙で申し伝えると「三好君や丸山君が書くならば」との御返事であった。わたしはそれで断念してその旨矢野先生に申し上げた。第二次四季は御両人の詩と投稿とで81号までつづき、文学報国会の非常時宣言で昭和19年に81号で終刊となった。堀さんは「仕方ないやね」と杉並のお宅で編集された。戦後すぐ第三次四季をお出しになったが、これは三号まで堀さんが編集し、四号は神西清さんの編集であったが、売れないで刊行元の角川書店社長は風呂を焚いて残部を処理したそうである。その後第四次四季が出たが、これは丸山薫さんが中心で、丸山さんが亡くなられるとつぶれた。八木憲爾君が社主で、わたしとは合わず、殆ど書かなかった。

「東京四季」とか関西の「季」とかいう雑誌を贈られて、四季の第五次発刊を企てたのは、永年の教師生活にピリオドを打ったひまからの発案で、井伏さんに電話かけると、「釣りにゆく」のでとのお断り、河盛さんは1万円送って下さったがお書きいただく様子もない。「東京四季」からは数人参加して貰って、わたしは岩崎昭弥君の詩と5万円の寄附とをありがたく受け、自分で印刷屋を探し、同人を集めて発刊したが、校正には手を焼き、嘗ての名編集者日下部雄一君に電話すると、「数年前に亡くなった」と奥さんの御返事であった。年もわたしよりは上だった由である。そんなわけで直木三十五の実弟植村先生や旧同僚の高田瑞穂君、近くに住む山住正己氏などのエッセーをもととして、浅野晃、小高根太郎、石山直一など諸先輩を名誉同人として雑誌の体をなしたが、会員が集まらず投稿も殆どないのは意外であった。

「東京四季」の同人大野沢緑郎氏の詩だけはわたしは新声として認めたが、校正が再校ではダメなことをつくづくと自覚した。九号では植村先生から電話でお叱りを受けた。そんなわけで十号で一応休刊とし、新しい刊行者（福地君が引受けてくれればよいが）がみつかるまで休刊とする。今度は内校用に原稿を書き直し（家内がそれをやった）、校正は福地君とで三校までやることとする。思えば定年後の暇を他人にまで迷惑をかけてしまったものである。読者ならびに同人へのおわびを記して休刊の辞とする。(昭和61年3月4日。田中克己)。

第九号正誤表

二ページ	本文2行目	×下正屋→千正屋○
三〃	〃7〃	×たたゆに→たためにに○
三〃	〃11〃	法(お)めも→怯めも○
三〃	〃20〃	隅(すみ)の→角の○
六〃	〃4〃	乞食(かたる)→乞食(かたり)
八〃	〃3〃	Aufzeichnum×gen→Aufzeichnung○en
八〃	〃17〃	×イタイア→イタリア○
一六〃	〃4〃	×汗され→汚○され
三四〃	〃24〃	（昭和60年11月11日夫人静子様逝去、哀悼）